阿木地区の縄文時代・弥生時代

大日向遺跡 縄文土器

阿木川河畔の阿曽田遺跡の発掘調査報告書によると縄文時代から鎌倉時代までの痕跡が確認されています。縄文時代最古段階の草創期に特有の有舌尖頭器も阿曽田遺跡から出土しており、縄文時代の初頭から阿木地域には人の活動の痕跡が残されています[a]。縄文時代草創期は氷期の終末期にあたり、気候は全体的に寒冷でありながら寒気と温暖期が繰り返される不安定な時期でした。縄文時代草創期は縄文時代の 1/3 を占めているものの、不安定な気候条件からか長期にわたる停滞的な文化を生んだ要因だったと考えられています[b]。

大日向遺跡発掘状況

縄文時代早期は、温暖化が進んだ時期で海面も上昇して、大規模集落も出現してきています。阿木地区の遺跡から縄文早期後半の土器である粕畑式土器(阿曽田遺跡)や入海式土器(阿曽田遺跡、大日向遺跡[c]は伊勢湾沿岸地方の土器が出土しています。東濃地方の縄文早期の経済圏は、東海を中心に、それも三河や尾張の海岸地方で漁猟を生業とする人々の文化と緊密に関係していたことが想像されます。阿曽田遺跡では関東系の茅山下層式の土器片が見つかっていますが、上ノ山式・塩屋上層式等伊勢湾沿岸地方のものがほとんどです。

久須田遺跡 埋設土器縄文後期～晩期

縄文前期は海進最盛期となり、海水面は現在の標高より 3.4m～4.4m ほど上昇しています。各地域の縄文集落は著しく隆盛し、縄文時代の定型的集落というべき環状集落が設立しました。沿岸部では活発な漁撈活動が行われ貝塚を伴う集落が成立しています。阿木地区の遺跡から、関東・関西に拡大したことがわかり、関東系の諸磯式土器(久須田遺跡[d]・阿曽田遺跡)や十三菩提式(阿曽田遺跡)、関西系の北白川下層式(久須田遺跡・阿曽田遺跡)や歳山式(大日向遺跡・久須田遺跡・阿曽田遺跡)が見つかっています。関西・関東両地方の経済圏・文化圏がぶつかり合う中で東濃地方の前期縄文文化が形成されたのでしょうか。

縄文中期は、順調に温暖化が続いています。この中期の温暖期こそ縄文時代最大の集落の隆盛期であり、中部関東地方では住居数、集落規模などが爆発的に増大し、各地に大規模な拠点的環状集落が形成されます。関東中部の住居数・集落数等のデータでは縄文時代全体の 70%近くに及んでいます。その期間は 630 年間です。集落数は住居址数ほど増えてないことから、一集落あたりの住居戸数が増えたようです[e]。

阿木地区の遺跡では関西系土器が後退していきます。中期前半は伊勢湾沿岸の咲畑式(宮ノ根遺跡[f]や中部高地の貉沢式・新道式・藤内式・井戸尻式(阿曽田遺跡)、中国地方の船元Ⅰ～Ⅲ式(阿曽田遺跡・宮ノ根遺跡)や里木Ⅱ式(宮ノ根遺跡)、近畿の鷹島式(阿曽田遺跡)が見られます。
中期後半は阿曽田遺跡でも膨大な遺物が出土しています。東海の中富Ⅰ～Ⅲ式(阿曽田遺跡)、中部高地の曽利Ⅱ～Ⅴ式(阿曽田遺跡)、関東系の加曽利Ｅ式(阿曽田遺跡)など関東中部の影響がつよく、関西系は後退しています。

阿曽田遺跡第 29 号住居址埋甕（縄文土器：縄文中期後半）

縄文時代中期後葉から後期初頭にかけて寒冷期が到来し大基部な環状集落は一気に没落し壊滅状態となり、小集落化し広範囲に分散していきます。後期初頭の寒冷期の後、温暖期となりその後しばらく緩やかな寒冷と温暖が繰り返されます。中部地方の集落も、中葉の加曽利Ｂ式期までが大規模集落の見られる時期です。しかしその後 800 年間程の長期にわたる寒冷期が訪れます。これ以降全体的には寒冷化がつづき縄文時代の終末を迎えることとなります。阿木地区の遺跡では縄文後期になると阿曽田遺跡は寒冷化の影響か一旦放棄されます。久須田遺跡では中国地方の中津式・福田 K2 式、近畿の北白川上層Ⅱ式の土器片が出土しています。その後、再び阿曽田では関東系の堀ノ内Ⅰ式(阿曽田遺跡・久須田遺跡)が出土しています。縄文時代最後の温暖期である、後期中葉には近畿の北白川上層式(阿曽田遺跡)、柔飼式(阿曽田遺跡)、元住吉山Ⅰ・Ⅱ式(阿曽田遺跡)、宮滝式(阿曽田遺跡)、関東の加曽利 B1・B2・B3 式(阿曽田遺跡)がみられます。

縄文晩期は寒冷期で東海の寺津式(阿曽田遺跡)・一乗寺Ｋ式(久須田遺跡)・安行 3c(久須田遺跡)・西ノ山式(久須田遺跡)・元刈谷式(阿曽田遺跡、久須田遺跡)・稲荷山式(阿曽田遺跡)がみられ東海の影響を強く受けています。寒冷化の中、出土資料もすくなくなりますが、東海の五貫森式(阿曽田遺跡・久須田遺跡)、馬見塚式(阿曽田遺跡・久須田遺跡)、樫王式(阿曽田遺跡)に比定される土器がみられ、晩期は東海地方の影響が強く、おそらく矢作川－岩村―阿木川に想定される古代交通路によって東濃地方に運ばれてきたのではないかと推測されます[g]。

詳細に調査された阿曽田遺跡から類推されるのは、縄文時代の生活は、狩猟,漁業及植物採集活動が主だったようです。このうち漁具と認められるものはみられませんでしたが、分解しやすい素材をつかった漁具は残らないケースも多く阿木川等での漁撈も否定できません。狩猟に関する石器としては石鏃、有舌尖頭器、石槍があり、植物採集には打製石斧、礫器、石皿、台石、敲石、叩き石、磨石が使われていました。

上阿曽田地区の 2 つのピークである縄文前期後半と縄文中期後半を比較すると、前者は植物採集に関連する石器群の比重は低く、後者になると比重が高くなったようです。後半にはドングリ・トチノキ類の種子が多く見つかっており、あく抜き技術が発達し野生植物が高度に利用されるようになったようです。

縄文時代の自然遺物について調査された記録は阿木地区では阿曽田遺跡しかありません。縄文後期ピットの覆土を 0.6mm の篩で水洗して得られた炭化種子類からの情報ですが、リョクトウ※、ノアズギ?、イヌタデ、アカメガシワ、ヒメウズ、エゴマ、エノキグサ、カラスノエンドウ等不明種を含めて 18 種 8873 粒、破片 11647(21＋α種)見つかったようです。縄文土器に残る圧痕研究からこの時代にも栽培植物が存在し、しかもダイズ属やアズキ亜属のように日本列島に於いても栽培化が進んだ可能性が示唆されて言います[h]。阿曽田遺跡で見つかった種子から同様の可能性があります。

※マメ類の炭化種子からの同定は困難であるといわれており、リョクトウに関しては誤同定の可能性が指摘されています。なお、中部高地の縄文時代前期から晩期にかけてダイズやアズキなどマメ類とエゴマが組合わせとなって栽培されている可能性が高く、阿曽田遺跡でもアズキ等とエゴマが同時に見つかっています。

参考

・吉崎昌一(1997)縄文時代の栽培植物,第四紀研究 36(5),343-346
・中山誠二(2015) 中部高地における縄文時代の栽培植物と二次植生の利用,第四紀研究,54(5),285-298

弥生時代は土器の形式により前期、中期、後期の三つの時代分けられ、この地方には中期(紀元前 100 年頃)になって、弥生文化が伝播してきたものと言われています[i]。弥生時代に入ると岩村町胴平・上平遺跡は弥生前期の遠賀川式・水神平式で、さらに天竜川水系の林里式・床ノ畑式が、また、中期の瓜郷式・貝田町式、後期の座光原式と弥生時代全般に亘る土器がみられますが、阿木地区ではこの時代の資料は極端に少なく、牧野遺跡から水神平式・座光寺原式、宮ノ根遺跡の貝田町式 1 片、明知線阿木駅前付近の田から後期の土器が認められたぐらいで分布が非常に少なく、阿木に比べて岩村が中心域ではなかったかと思われます[j]。

大日向遺跡からは弥生時代に近い住居跡もみつかつており、台地上に住居をおき、湿地を利用し

た小規模小田の生活形態をとっていたのではないかと思われます[k] 。
稲作については先に述べたように弥生時代の資料が極端に少なく籾殻やその痕跡は見つかっていませんが、恵那の中野方の弥生時代中期(紀元前 100 年)の土器片から籾の痕がみつかっていることから[l]、阿木地区にもこの頃には稲作が始まっていたのではないでしょうか。

a 中津川市教育委員会."人口遺物".阿曽田遺跡発掘報告書.中津川市.1985,p438.
b 気候変動と縄文集落の変遷 2023.1.8「R4 年度なかがわの遺跡展講演会」
c 大日向遺跡発掘委員会.大日向遺跡発掘概報.中津川市.1967,p17.
d 中津川市.久須田遺跡発掘調査報告書.中津川市教育委員会.1991,p185.
e 気候変動と縄文集落の変遷 2023.1.8「R4 年度なかがわの遺跡展講演会」
f 中津川市.宮ノ根古墳群発掘調査報告書.中津川市教育委員会.1978,p41.
g 中津川市."考察".宮ノ根古墳群発掘調査報告書.中津川市教育委員会.1978,p40.
h 中山誠二.縄文土器に残る圧痕から栽培植物の起源を探る.化学と教育.2018,66(8),p372-375
i 小坂忠昭."弥生人の暮らし".恵那市ふるさと学習読本正家廃寺と古代の恵奈. 恵那市教育委員会.2021, p22.
j 中津川市."考察".宮ノ根古墳群発掘調査報告書.中津川市教育委員会.1978,p40.
k 中津川市."弥生時代".中津川市史通史上巻.中津川市.1968,p42.
l 小坂忠昭."弥生人の暮らし".恵那市ふるさと学習読本正家廃寺と古代の恵奈. 恵那市教育委員会.2021, p20.